



原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人
鎮守の森のプロジェクト事務局次長)

第七回 ハイソリッヒ・シユリーマン 『シユリーマン旅行記 清国・日本』

ギリシャ神話に登場するトロイの木馬。今回はその戦いの舞台で、伝説上の存在と考えられていたトロイヤ遺跡を発掘し世界を驚かせたハイソリッヒ・シユリーマン（一八二二—一八九〇、ドイツの考古学者で商人）のお話です。

シユリーマンは高校の歴史教科書にも登場するほど有名ですが、トロイヤ遺跡を発見する前に日本に来ていたことはあまり知られていません。彼は明治維新の三年前、慶応元年の一八五六年六月から一カ月間を日本で過ごしています。この頃の日本では列強の公使とその随行員のほかは江戸を訪問できませんでした。一般の外国人だった彼はアメリカの仲介で、

江戸に入ります。彼は日本の旅で何を感じたのでしょうか。まず紹介したいのは、横浜の税関でのエピソードです。

荷物を解くと大仕事になるので、日本に来る前のシナで通用したように、官吏に心づけを渡して免除してもらおうとします。ところが、「なんと彼らは、自分の胸を叩いて『ニッポナムスコ』（日本男児？）と言い、これを拒んだ。日本男児たるもの、心づけにつられて義務をないがしろにするのは尊厳にもとる、というのである」。結局、心づけを渡さなくてもニッポナムスコらは親切に対応してくれたとのこと。



商人時代のシユリーマン
(『シユリーマン旅行記』より)

場は一般的でなく、天然の温泉が溜まってできた野湯でした。そのため男湯・女湯という概念はなく、混浴は自然発生的にできたのです。江戸の町は庶民でも水道が使える世界最先端の都市でしたが、薪は高価であり、風呂のある家はほとんどなかったため、人々は公衆浴場に出かけました。そこには湯上り場もあり、将棋や会話を楽しむなど社交場でもありました。今でも混浴できる温泉は全国にありますから、日本人にとっては本来自然な感覚なのかもしれません。

ところで、ちょっときわどい話になるかもしれませんが、シユリーマンは浅草に出かけた時、日本人の暮らしぶりをよく伝えるものとして、こんな場面も紹介しています。

「もっとも大きくて有名な寺の本堂に『おいらん』の肖像画が飾られている事実ほど、われわれヨーロッパ人に日本人の暮らしぶりを伝えるものはないだろう。」

また、江戸に入ると彼にはたくさん護衛が付けられ、「私はまるで囚われ人のようであった」と辟易していますが、この時も同じことが。
「……役人たちが欲得づくでこのげんわりするまでの警備に励んでいるのではないことはよく承知している。だからなおのこと、その精勤ぶりに驚かされるのだ。彼らに対する最大の侮辱は、たとえ感謝の気持ちからでも、現金を贈ることであり、また彼らのほうも現金を受け取るくらいなら『切腹』を選ぶのである」
日本人の真面目な性格と仕事に対する誇りが強く窺えますね。

他にも彼は江戸の町を歩きながら、日本人の家庭生活のしくみを細かく観察しています。
「日本人はみんな園芸愛好家である。日本の住宅はおしなべて清潔さのお手本になるだろう」

「床は道路より三十センチほど高く、絹で縁取った薄い竹の敷物（畳のことであろう）で覆われている。この敷物は長年にわたってきわめて清潔な状態が保たれている。というのは、ここには上がる時、みな、裸足になるからである。……家中に上がるときは、莫座を敷いた床の前に履物を脱いでおく」

他国では、人々は娼婦を憐れみ容認しているが、その身分は卑しく恥ずかしいものとされている。だから私も、今の今まで、日本人が『おいらん』を尊い職業と考えていようとは、夢にも思わなかった。ところが、日本人は、他の国々では卑しく恥ずかしいものと考えている彼女らを、崇めさえしているのだ。そのありさまを目のあたりにして……長い間、娼婦を神格化した絵の前に呆然と立ちすくんだ」

現代の日本人も花魁をヨーロッパ人と同様に捉えているかもしれませんので少し説明しますと、花魁とは吉原遊女の最高位の者です。遊女と言っても、吉原は幕府のお墨付きで営まれた公娼であり、私娼の品川や板橋、千住などとは全く違い、高級な武士や豪商など、いわゆる「通」の人々が入りする格式の高い世界でした。教養と芸事を見つけた吉原の遊女は、源氏名を名乗ることができ、亡くなればお墓に手厚く葬られ、なかには人々に崇められるほどになる花魁もいたそうです。

日本人は勤勉で、清潔好きで、寛容な性格を持つ一方、このような「通」の世界を形成する余裕や幅も持っていました。そうした文化的な厚みのようなものが日本にはあることを、わずか一カ月の旅でシユリーマンは見たのかもしれませんが。

こうした簡素で清潔な日本の生活様式を見て彼は、ヨーロッパでは豪華な家具調度などを揃えるために出費がかさむが、本来はそれら抜きでも充分やってゆけることが分かったと述べています。

さらに、「日本人が世界でいちばん清潔な国民であることは異論の余地がない。どんなに貧しい人でも、少なくとも日に一度は、町のいたるところにある公衆浴場に通っている」と述べた上で、混浴の風習について言及しています。

「夜明けから日暮れまで、禁断の林檎を齧る前のわれわれの先祖と同じ姿になっていた老若男女が、いっしょに湯をつかっている。彼らはそれぞれの手桶で湯を汲み、ていねいに体を洗い、また着物を身につけて出て行く。『なんと清らかな素朴さだろう！』……そこでは淫らな意識が生まれるようがない。父母、夫婦、兄弟——すべてのが男女混浴を容認しており、幼いころからこうした浴場に通うことが習慣になっている人々にとって、男女混浴は恥ずかしいことでも、いけないことでもないのである」

じつは混浴については、困惑する外国人も少なくなかったのですが、彼は日本人の素朴で寛容な性質の現れと見たようです。

それにしても、混浴の風習はなぜ生まれたのでしょうか。古くは大きな共同浴